2018年6月16日（土）　新橋レンガ通りホール　ウパニシャッド（第23回）

**≪ナチケーターの２番目の願い（第１７節の復習）≫**

前回は第１７節まで終わりました。第１７節には「３つのものまたは３人（母、父、師）から学び、ナチケーターの儀式を３回行い、３つの行い（儀式、寄付、聖典の勉強）をし、ブラフマンから出ているものをよく知って、ヴィラートと自分を同一視する」とありました。

その結果は「輪廻を止めて最高の平安を得る」でした。勉強、儀式、知識の結果は「輪廻を止める」、「最高の平安を得る」ですが、ナチケーターの「目的（願い）」は何でしたか。ナチケーターに「輪廻を止めたい」という目的はありませんでしたね。

「天国に行きたい」、それがナチケーターの目的（２番目の願い）でした。最初の願いは「お父さんを喜ばせる」ことでした。お父さんは（ナチケーターが言ったことに）まだ腹を立てているかもしれないので、お父さんがそれを忘れて穏やかな状態になり、また幸せが戻ってほしいというのが最初の願いでした（ウパニシャッド-20参照）。

そして、２番目の願いが「天国に行きたい」でした。ナチケーターは天国のことを皆さんから聞いていましたし、聖典からも勉強していました。天国には楽しみのことがたくさんあります。この世界にも楽しみのことがありますけれども、天国の楽しみはこの世界の楽しみよりずっとたくさんでいろいろな種類がありそれは終わらないようです。

**＜天国の楽しみと世俗的な楽しみとの違い＞**

天国では楽しみを得るためにやらなければいけないことは何もありません。一方で、普通の世俗的な楽しみのためにはお金が必要です。天国の楽しみのためにお金も何も要りません。天国に行きますと楽しみは自然に出ます。これが世俗的な楽しみと天国の楽しみとの違いの一つです。

また別の違いがあります。世俗的な楽しみの経験には病気が伴う可能性がありませんか。例えば、食べ過ぎますとお腹をこわします。お酒を飲みすぎますと身体の状態が悪くなります。そして世俗的な楽しみのときは心配もあります。世俗的な楽しみは「混じり気のない楽しみ・幸せ」（unmixed happiness、unmixed joy）ではありません。

楽しみもありますが心配もあります。それが混じり気（mixed）ですね。少しでも心配や怖さがあったら１００％純粋な楽しみにはなりません。楽しみがいつ終わるのか、楽しみが突然なくなるのではないかという心配、病気の心配、人間関係の問題の心配などいろいろな心配があります。

「混じり気のない楽しみ・幸せ」は何も混ざっていません。世俗的な楽しみには心配や怖さが混ざっていますから純粋な楽しみではありません。しかし、天国に行きますとその問題はないです。病気の問題はありませんし、突然に楽しみがなくなることもありません。楽しみは長く続きます。

ナチケーターはそのことを聞いていましたから、死神（ヤマ）に天国へ行く方法を教えてほしいと願いました。死神は天国にどのように行くのかその方法を知っています。死神は神様ですから知っていますね。また、自分の経験もあります。

そして死神は神様というだけでなく特別な方です。皆さんの人生をコントロールしています。すべての生き物の生死をコントロールしています。いつ生まれていつ死ぬかを全部コントロールしています。そしてとてもパワフルなゴッドです。

ヤマは「あなたの３つの願いをかなえます」と言いましたから、ナチケーターは最初にとても普通の世俗的な願いをしました。それは先ほどお話ししたように家族に関係した願いでした。そして２番目の願いが天国の楽しみのことでした。それについて第１７節にありました。次は第１８節です。

**≪カタ・ウパニシャッドPart 1 – Chapter 1 第１８節≫**

***triṇāciketastrayametadviditvā ya evaṁ vidvāṁścinute nāciketam;***

***トゥリナーチケータストゥラヤメータッﾄﾞ ヴィディッㇳヴァー　ヤ　エーヴァㇺ　ヴィﾄﾞヴァーㇺ シュチヌテー　ナーチケータㇺ；***

***sa mṛtyupāśān purataḥ praṇodya śokātigo modate svargaloke.***

***サ　ムリッティユパーシャーン　プラタㇵ　プラノーディヤ　ショーカーティゴー　モーダテー　スヴァルガローケー***

［「カタ・ウパニシャッド カタカナ読み表示と日本語解説」のサンスクリット語のカタカナ表記をマハーラージが最初に少しずつ唱えて皆がそれに続き唱え、最後にマハーラージと皆が一緒に唱える。以下の第１９節についても同様です。］

節の語を分けます。「triṇāciketastrayametadviditvā ya evaṁ vidvāṁścinute nāciketam」は、「triṇāciketaḥ trayam etat viditvā yaḥ evam vidvān cinute nāciketam」（トゥリナーチケータㇵ　トゥラヤㇺ　エータット ヴィディッㇳヴァー　ヤㇵ　エーヴァㇺ　ヴィドヴァーン チヌテー　ナーチケータㇺ）になります。

「sa mṛtyupāśān purataḥ praṇodya śokātigo modate svargaloke」は、「saḥ mṛtyupāśān purataḥ praṇodya śoka-ati-gaḥ modate svargaloke」（サㇵ　ムリッティユパーシャーン　プラタㇵ　プラノーディヤ　ショーカアティーガㇵ　モーダテー　スヴァルガローケー）になります。

言葉の意味です。前段のヤㇵは「その人」、エータットは「前に話した」、トゥラヤㇺは「３つのこと」、ヴィディッㇳヴァーは「理解して」、トゥリナーチケータㇵは「ナチケーターの火の儀式を３回行い」、エーヴァㇺは「このように」、ヴィドヴァーンは「わかって」、「理解して」、ナーチケータㇺは「ナチケーター・アグニ（ナチケーターの火の儀式）」、チヌテーは「準備しています」、「礼拝しています」です。

ヴィディッㇳヴァーは３つのことを「理解して」で、３つのこと（トゥラヤㇺ）とは、ナチケーターの火の儀式の祭壇に必要なレンガの数とレンガの種類とレンガを用いた祭壇の作り方です。祭壇を作ってナチケーターの火の儀式を「行う」がチヌテーの意味です。

トゥリナーチケータㇵの意味は「ナチケーターの火の儀式を３回行う」ですが、サンスクリット語のtri（トゥリ）は英語でtriple（トリプル）ですから似ていますね。サンスクリット語、ヨーロッパ系言語、ラテン語はけっこう似ています。

後段のサㇵは「その人」、ムリッティユパーシャーンは「死の束縛」、プラタㇵは「（死ぬ）前」、プラノーディヤは「棄てます」、ショーカアティーガㇵは「苦しみ、悲しみを渡ります・超越します」、スヴァルガローケーは「天国」、モーダテーは「楽しんでいます」です。「棄てる」（プラノーディヤ）は「（束縛を）切る」という意味です。

この節の全体的な意味は、「ナチケーターの火の儀式をよく知っている求道者、すなわち、火の儀式のための祭壇に必要なレンガの数、レンガの種類、そして祭壇の作り方を知っている人は、ナチケーターの火の儀式を３回行いますと、その人はその結果で死の束縛を切り、死ぬ前に幸せ・楽しみを得て、死んだ後には天国に行ってとても楽しみます」となります。２つの結果が出ますね。一つの結果は死ぬ前の結果、もう一つの結果は死んだ後の結果です。

さて、ムリッティユパーシャーンのムリッティユは「死」、パーシャーンは「束縛」で、ムリッティユパーシャーンは「死の束縛」という意味ですがそのイメージは出ますか。「死」はわかりますが「死の束縛」はなかなかわからないと思います。「死の束縛」とはどういう意味で使われているのでしょうか。

**＜死の束縛（ムリッティユパーシャーン）＞**

この死とは「肉体的な死」ではありません。「霊的な死」（spiritual death）を意味しています。前後関係で「死」の意味はいろいろになります。「穴があったら入りたい」という言葉がありますね（笑い）。言い換えますと「死ぬほど恥ずかしい」になりますが、これは「心のレベル」でも死ぬことがあることを示しています。同じように、「霊的な死」もあります。

では、「霊的な死」とはどんなことでしょうか。求道者の目的は「解脱がほしい」ですね。解脱がほしい、もっと浄らかになりたい、純粋になりたいと願います。しかし、それができないなら、例えば「知識」がない（（霊的な）無知）ならば、それは求道者の「霊的な死」です。「死の束縛」は「霊的な死」と同じ意味です（例えば、無知に縛られて霊的に進めないということです）。

霊的になりたいなら道徳的にならないといけないですね。「ダルマ」（道徳的なもの）がないと「霊的な生活」はできないです。「霊的な生活」のためには「知識」も「識別」も「純粋になる」ことも必要です。「霊的な生活」ができたら、だんだんと霊的な道に進めますね。その反対の生活は霊的に進むことができないです。進むことができないだけではなく堕落します。それが「霊的な死」です。

「知識」と「識別」とは密接な関係があります。「知識」（ギャーナ）は「識別」のベースです。「真理は何か」、それがギャーナですね。真理の特徴は、例えば、永遠、無限、絶対です。それでは「**真理を悟る**」ためには何が必要ですか。それには「識別」が必要です。

真理についての「知識」（真理の理解）がないと「識別」することはできないです。ですから、「識別」のために最初は真理の勉強が必要です。「識別」のベースは真理についての「知識」です。そして「真理を悟る」ためには「識別」が必要です。

もう一度言います。**「知識」がない（真理が何かわからない）と「識別」はできません。しかし、真理を理解する（「知識」）だけでは「真理を悟る」ことはできません。「真理を悟る」ためには「識別」が必要です。**「霊的な生活」で大事な２つのことは、一つが真理の「知識」であり、もう一つが「識別」です。その反対は「霊的な死」です。

「識別」の内容は何ですか。何が永遠か、何が無限か、ということですね。ですから、永遠がわからないと識別できないですね。永遠がわかりますと何が永遠ではないかがわかります。永遠のことがわからないとすべてが永遠のようです。普通の人、世俗的な人にとっては全部が永遠みたいです。全部が無限みたいです。

しかし、ときどき「経験」からそうではないことを勉強します。勉強しますがすぐに忘れます。「聖典」から勉強していませんから。世俗的な人が経験から勉強するのはどのようなときでしょうか。例えば、とても近い親戚の方が亡くなります。そのときまでの考えではその親戚の方は永遠でした。

インドには、火葬場に行くと「放棄」の考えが始まるという言葉があります。どうしてその考えが始まるのでしょうか。亡くなった方は少し前まで身体がありましたがその１時間半ほど後には灰になっています。だから生命は一時的なものです。そのように火葬場に行って「放棄」の考えが出ます。しかし、その「放棄」は家に戻るとまた忘れます。

普通の人は、一時的と永遠の違いは「経験」からわかります。ですが、「マーヤー」の影響ですぐに忘れます。しかし、霊的な人（spiritual person）は「聖典」から勉強してわかります。経験で確認しています。皆さんの身体が一時的であることを「聖典」から学び、親戚や好きな人が亡くなりますとそれを確認します。本当はそうです。

私は東日本大震災で起きた津波の後に陸前高田市（岩手県）といわき市（福島県）に行きました。津波によって多くの方が亡くなりました。考えてください。津波が起こる直前までの普通だった生活と津波が起こった後のことを。人の命がどれくらい一時的か、そのことをその場所に行って強く感じました。

何が一時的で何が永遠でしょうか。何が有限で何が無限でしょうか。例えば、我々は楽しみの経験が絶対にありますね。感覚的な楽しみがありませんか。ですが、それは一時的で有限です。そのように、一時的と永遠、有限と無限、相対的と絶対を「識別」します。それが「霊的な生活」のしるしです。

これに対して、「霊的な死」の束縛（「霊的な死」に人を縛るもの）は次の４つです。

　　**A-jnāna（アッギャーナ）　　無知**

**A-dharma（アダルマ）　　　非道徳的なもの**

**Rāga（ラーガ）　　　　　　 執着**

**Dvesha（ドゥヴェーシャ）　 憎しみ**

「知識」（ギャーナ）の反対は「無知」（アギャーナ）です。「無知」は「霊的な死」のしるしです。「道徳的なもの」（ダルマ）の反対は「非道徳的なもの」（アダルマ）です。「非道徳的なもの」には、嘘を使う、欲張る、怒りなどがありますが、これらはみな「霊的な死」のしるしです。

ラーガは「執着」、ドゥヴェーシャは「憎しみ」です。大好きと大嫌い、その両方です。大好きになった後で「執着」になります。ラーガには好き、大好き、執着の３段階があります。ドゥヴェーシャには、嫌い、大嫌い、憎しみの３段階があります。最初は嫌い、嫌いが深くなりますと大嫌い、もっと深くなりますと「憎しみ」になります。

これらの両方（ラーガとドゥヴェーシャ）が求道者にとって「霊的な死」のようです。ラーガとドゥヴェーシャの状態に入りますと「識別」することができません。それだけでなく、ラーガの状態では神様のことを忘れて執着した人のことをずっと考えます。しかし、執着の対象は一時的ではないですか。人間はみな一時的ですから。

心がいつも執着した人のことを考えますと神様のこと・真理のことを考える時間もスペースもないです。それは束縛ではないですか。「霊的な死」の束縛です。好きな人のことをずっと考えますと神様のことを考えることができなくなります。神様のことを考えても深い考えではありません。例えば、マントラを唱え、を繰りますが、神様のことを考えていません。

心が執着する対象はいろいろあります。人ではなく動物（例えば、ペット）に執着することもあります。有名なバラタの例があります。バラタは王様でした。ヒンドゥー教に４つの時期（ブラフマチャリヤ、ガールハルティヤ、ヴァーナプラスタ、サンニャース）があります。バラタは在家の生活が終わり放棄のために森に入りました（ヴァーナプラスタ期）。

そしてとても神様のことを考えていました。霊的にけっこう進んでいます。しかし、突然、バラタは鹿の子どもにとても執着するようになりました。どれぐらい執着になっていたかと言えば、死ぬときも神様のことを考えないで鹿のことを考えながら死にました。それで、来世で鹿に生まれました（笑い）。

ですから皆さん気を付けてください。ペットも良いですけれど来世にペットの形で生まれる可能性がありますから（笑い）。ペットが執着にならないようにしてください。バラタの例がありますから。しかし、ペットを愛することは問題ありません。

人間ではなく生き物でもないものに執着する可能性もあります。その対象は仕事です。仕事が一番の執着になる可能性があります。マハーマーヤー（偉大なマーヤー）のネット（網）はすごいですね（笑い）。とてもとても「識別」をしないと無意識でいつ執着が出るかわかりません。いつも「識別」することが意識の中にないとその問題が出ます。

ラーガとドゥヴェーシャの説明を続けます。自分は誰も愛していないから自分には執着がないと考える人があったとします。ですが、その人には嫌いな人がいます。そうすると結果は同じです。我々には両方の問題があります。ラーガの問題もあり、ドゥヴェーシャの問題もあります。

執着と嫌い（憎しみ）はなぜ問題なのでしょうか。なぜなら、執着すると執着した人、動物、ものだけしか思い出しません。嫌いだと嫌いな人のことを心の中に考えます。それら両方の考えが深くなりますと「神様のことを考える」、「真理のことを考える」ことの障害になりませんか。執着、嫌い、その両方の結果で真理のことを考えることができなくなります。その意味で、「霊的な死」と言っています。

アギャーナ、アダルマ、ラーガ、ドゥヴェーシャ、これらはすべて「霊的な死」の網です。パーシャーンは網（ネット）と束縛（ボンデージ）の両方です。それらは結果が同じです。網に捕らえられるのと束縛されるのは同じではないですか。それが「死の束縛」です。

**＜死の束縛を切ることによって得られる結果＞**

プラタㇵは「～の前」で「死の前」という意味です。プラノーディヤは「棄てます」ですが「（束縛を）切る」という意味でしたね。レンガの数・種類・使い方を知って３回ナチケーターのヤッギャー（火の儀式）を行った方は、死ぬ前に、アギャーナ、アダルマ、ラーガ、ドゥヴェーシャの束縛を切ります。

死ぬ前にそれを切りますとその結果は、ショーカアティーガㇵです。ショーカは「苦しみ」、「悲しみ」です。アティーガㇵは「渡ります」、「超越します」です。ナチケーターのヤッギャーを３回した人は、死ぬ前に、その人のすべての苦しみ、悲しみがなくなります。苦しみ、悲しみだけでなく、疑い、怖れもなくなります。

我々には３つの苦しみがあります。オーム・シャーンティ・シャーンティ・シャーンティ・ハリㇶ・オームとシャーンティを３回唱えるのは、その３つの苦しみをなくすためだということを前に説明しました（ウパニシャッド-15参照）。３つの苦しみの原因・源は次の通りでした。

　　**Ādhyātmika**（アーディアートミカ）

**Ādhidaivika**（アーディダイヴィカ）

**Ādhibhautika**（アーディバウティカ）

この３種類は覚えてください。とても基礎的な事柄です。

Ādhyātmika（アーディアートミカ）は前後関係でいろいろ意味があります。「霊的」という意味もあります。アーディアートミカの人と言えば、霊的な人を意味します。しかし、ここでは、苦しみ、悲しみの「源が自分」という意味になります。例えば、病気がありますとその結果で苦しみ、悲しみがありますが、源は自分ですね。

Ādhidaivika（アーディダイヴィカ）は、苦しみ、悲しみの「原因が神（デーヴァ）」という意味です。自然災害がそうですね。神道にも自然の神、海の神があります。例えば、津波の源は海ではないですか。海の神。ヒンドゥー教の中にも同じアイデアがあります。自然のいろいろな神々がいてそれが原因です。その苦しみ、悲しみの原因は神（デーヴァ）です。

Ādhibhautika（アーディバウティカ）の苦しみ、悲しみは「生き物（ブータ）が原因」です。その例は数えられないほどたくさんあります。例えば、いじめなどで心が傷つくことがありませんか。それは自分以外の人が原因の苦しみではないですか。

それは人間関係においてですが、他にも、例えば、蛇にかまれたり、トラに食べられたり（笑い）。それから、犬にかまれることはありませんか。日本では今はあまりないかもしれませんがインドではあります。そのように苦しみ、悲しみの源が生き物です。

３つの苦しみ、悲しみは次の通りです（その原因・源に対応しています）。

**Ādhyātmika dukha**（アーディアートミカ・ドゥッカ）

**Ādhidaivika dukha**（アーディダイヴィカ・ドゥッカ）

**Ādhibhautika dukha**（アーディバウティカ・ドゥッカ）

dukha（ドゥッカ）は「苦しみ」、「悲しみ」と言う意味です。「自分が源」である自分の身体と心の苦しみが「アーディアートミカ・ドゥッカ」です。例えば、うつ病ですが、それは自分の心の問題ですね。源は自分です。自分の身体と心が原因になっています。

「アーディダイヴィカ・ドゥッカ」は「自然が源」である苦しみ、悲しみです。「アーディバウティカ・ドゥッカ」は「他の人間（自分以外）と生き物が源」である苦しみ、悲しみです。その３つのドゥッカを取り除くためにシャーンティを３回唱えます。

ショーカアティーガㇵのショーカはドゥッカと同じですが、ドゥッカはすべての苦しみ、悲しみを含む包括的な言葉です。執着した人やものがなくなると我々は悲しみます。それがショーカですが、この節でショーカは苦しみ、悲しみのシンボル的な意味で使われています。

ナチケーターのヤッギャーを３回行う人はショーカを超越します（アティーガㇵ）。これは否定的な表現です。ショーカがなかったら、苦しみ、悲しみがなかったら（否定的表現）、何の状態ですか。その状態は幸せの状態、穏やかな状態ですね（肯定的表現）。

それは死ぬ前のことです。死んだ後は何ですか。死んだ後は天国に行って楽しみます（モーダテー　スヴァルガローケー）。このように、ナチケーターの儀式を３回する人は、死ぬ前と死んだ後の両方の結果を得ます。死ぬ前は幸せ、死んだ後は天国に行って楽しみます。

**＜天国の楽しみ、霊的な楽しみ＞**

天国の楽しみの特徴は何でしょうか。最高の天国がヒラニヤガルバ・ロカです。前に話しましたね。ヴィラートとヒラニヤガルバは一緒です。ヒラニヤガルバと自分を同一視してそれを愛しますと自分がヒラニヤガルバになります。

デーヴァ・ロカ、ブリハスパティ・ロカ、チャンドラ・ロカ、スーリヤ・ロカなどの天国のレベルもありますが、一番上のレベルの天国がヒラニヤガルバ・ロカ（サッティア・ロカ、ブラフマー・ロカも一緒）です。一番上の天国とその下のレベルの天国の楽しみとは想像できないほどの違いです。それだけでなくその場所にいる時間も長いです。

皆さんがだんだんと浄らかになりますと、普通のとても世俗的な人より、楽しみの質と強さ（intensity）は深く、高くなります。普通の人の楽しみはほとんど「感覚的」（sensual）ではないですか。そうしますと動物と一緒ではないですか。

動物の楽しみは、食べます、寝ます、子どもを作ります。それはみな感覚のレベルですね。人間の中にもそういう人がいますね。形は人間ですけれどもそれ（感覚的な楽しみ）だけで十分な人が。

その種類の楽しみは限度がありますね。たくさん食べてもまたお腹が空きます。その種類の楽しみは長続きしません。楽しみは消えます。それだけでなく反動や危険のこともあります。しかし、「心」の楽しみ（mental pleasure）は肉体的・感覚的な楽しみよりもっと良い種類ではないですか。

例えば、愛します。例えば、お母さんが息子を愛します。それは感覚のレベルではないでしょう、絶対に。「心」のレベルですね。そのとき、お母さんの楽しみは種類も違い、しかももっと深いです。楽しみは精妙（fine）になればなるほど深くなります。

また、例えば、とても面白い本を読みますとその種類の楽しみはずっと続いていませんか。それがとても良いではないですか。その種類の楽しみは「知性」（intellectual）のレベルの楽しみです。

最初は、「肉体的な」楽しみ（physical pleasure）と「感覚的な」楽しみ（sensual pleasure）。その上は「心の」楽しみ（mental pleasure）。その上は「知的な」楽しみ（intellectual pleasure）です。では、さらにその上は何ですか。

それは「霊的な」楽しみ（spiritual pleasure）です。その楽しみの例が、ラーマクリシュナの弟子たちの回想録（reminiscence）の中にたくさんあります。シュリー・ラーマクリシュナのドッキネッショルに一回行ってシュリー・ラーマクリシュナの交わりに入ってコルカタに戻って一か月くらいその楽しみが続いていました。

これが「霊的な」楽しみです。普通の楽しみではありません。そして人間の愛ではないです。一か月くらい陶酔したような状態になります。酔っぱらいの楽しみもありますがそれはお酒が原因の普通の世俗的な楽しみです。

お酒の楽しみにはけっこう反動もありますね。それだけでなくあまり続きません。そのフィーリングは私には経験がありませんが、皆さんお酒を飲んだ後どうでしょうか。日本人なら経験がありませんか。ありますね、絶対（笑い）。心配のことを忘れフィーリングは良くなり軽くなって飛んでいます。ですが、そのときは良いですけれどもそれは消えます。

そして、もっとたくさんお酒を飲まないとその状態を得られなくなります。それが問題です。たばこも同じです。もっとたばこを吸わないとお酒を飲まないといられなくなります。それが危険です。そして、反動でだんだん鈍い状態になっていきます。

このように楽しみをイメージで比較することができますね。**楽しみが精妙になればなるほど楽しみの質と強さはもっともっと上がります**。天国に行きますとそれがさらに大きくなりますがそれは想像するのが難しいほどです。

**＜カタ・ウパニシャッドの目的＞**

カタ・ウパニシャッドは天国に行くことで終わっていません。もし人生の目的が、亡くなる前に幸せを得て亡くなった後にヒラニヤガルバの天国に行って楽しむことだったら、それが本当に最高のことだったら、カタ・ウパニシャッドはそこで終わっているはずです。しかし、そこで終わっていない。どうしてそこで終わっていないのでしょうか。

ナチケーターの儀式を３回行いますと、とても素晴らしく高い結果が得られます。しかし、それが最後ではありません。カタ・ウパニシャッドの話はまだ先に進んでいます。その理由は、その楽しみも天国もなくなるからです。

ヒラニヤガルバ・ロカも最高の天国ですけれどもそこからまた戻る可能性があります。人間の形で戻る可能性があります。天国に行ってもそのときに欲望が少し残っている可能性があります。そして少しでも欲望があったらまた戻らないといけない。

ですから、**ヒラニヤガルバの場所（一番上の天国）に行くのは「解脱」ではない**。それが一番大事な理解です。ヒラニヤガルバ・ロカは最高の天国ですけれど解脱ではありません。求道者の目的は「解脱」ですね。すべての束縛からの解放。ヒラニヤガルバ・ロカに行くのと「解脱」とは同じではない。それだけ理解してください。

**ウパニシャッドの目的は「解脱」です**。ウパニシャッドのディスカッションの目的は天国ではないです。カルマ・カーンダ（ヴェーダの儀式の部分）の目的は天国に行くことです。最高の天国に行くことができますが、それは永遠の至福ではありません。

ヴェーダに２つの部分があります。カルマ・カーンダとギャーナ・カーンダです（ウパニシャッド-21参照）。カルマ・カーンダにはサンヒター、ブラフーマナ、マントラなどの部分がありますがそれらの目的はすべて天国です。

しかし、一番上の天国に行ってもそれは「解脱」ではありません。「解脱」でないと、我々のすべての苦しみ、悲しみは絶対になくなりません。少しの部分が残る可能性があります。そこからギャーナ・カーンダ、知識の部分になって、ウパニシャッドは始まります。

ナチケーターのヤッギャーはみな儀式です。そのことを忘れないでください。結果はとてもとても偉大ですけれども、死ぬ前と死んだ後の両方で大きな結果がでますけれども、求道者の目的はそれではないです。目的は「解脱」です。「解脱」と天国は一緒ではないです。

「解脱」を得るためのやり方は何でしょうか。天国に行く方法とは別のやり方です。目的が違えば方法も別です。そのときナチケーターの儀式は何も助けになりません。やり方は全く別です。「解脱」が目的のやり方、それがウパニシャッドの内容です。

まだウパニシャッドに入る前のことが続いています。ナチケーターのヤッギャーについてもう少し続きます。それが次の第１９節です。

**≪カタ・ウパニシャッドPart 1 – Chapter 1 第１９節≫**

***eṣa te’gnirnaciketaḥ svargyo yamavṛṇīthā dvitīyena vareṇa;***

***エーシャ　テーグニルナチケータㇵ　スヴァルグヨー　ヤマヴリニーター　ドヴィティーイェーナ　ヴァレーナ；***

***etamagniṁ tavaiva pravakṣyanti janāsa-stṛtīyaṁ varaṁ naciketo vṛṇīṣva.***

***エータマグニㇺ　タヴァイヴァ　プラヴァクシュヤンティ　ジャナーサ ストゥリティーヤㇺ　ヴァラㇺ ナチケートー　ヴリニーシュヴァ***

節の語を分けます。

「eṣa te’gnirnaciketaḥ svargyo yamavṛṇīthā dvitīyena vareṇa」は「eṣaḥ te agniḥ naciketaḥ svargyaḥ yam avṛṇīthāḥ dvitīyena vareṇa」（エーシャㇵ　テ　アグニㇶ　ナチケーターㇵ　スヴァルガㇵ　ヤㇺ　アヴリニーターㇵ　ドヴィティーイェーナ　ヴァレーナ）になります。

「etamagniṁ tavaiva pravakṣyanti janāsa-stṛtīyaṁ varaṁ naciketo vṛṇīṣva」は「etam agnim tava eva pravakṣyanti janāsaḥ tṛtīyam varam naciketaḥ vṛṇīṣva」（エータㇺ　アグニㇺ　タヴァ　エーヴァ　プラヴァクシュヤンティ　ジャナーサㇵ トゥリティーヤㇺ　ヴァラㇺ ナチケーターㇵ　ヴリニーシュヴァ）になります。

言葉の意味です。今、ヤマがナチケーターに言っています。ナチケーターㇵは「ナチケーター」という呼びかけです。ヤㇺは「儀式について」、ドヴィティーイェーナ　ヴァレーナは「あなたの２番目の願いの関係で（あなたに教えました）」です。天国に行きたいという２番目の願いがありましたから、それについて私はあなたに教えましたということです。

アヴリニーターㇵは「あなたはその願いをしました」、エーシャㇵ　スヴァルガㇵ　アグニㇶは「私はあなたに天国に行くことができるこの儀式（ナチケーター・アグニ）を教えました」です。

ジャナーサㇵは「人びと、普通の人は」、エータㇺ　アグニㇺは「この火」、タヴァ　エーヴァは「あなたの名前で（今から呼びます）」です。ヤマの恩恵によってこの儀式は今からあなたの名前で「ナチケーター・アグニ」と呼ばれますと言っています。プラヴァクシュヤンティは「呼びます」です。

それから後段です。ナチケーターㇵは「ナチケーター」という呼びかけ、トゥリティーヤㇺ　ヴァラㇺ　ヴリニーシュヴァは「３番目の願いをしてください」です。

ヤマはナチケーターに３つの願いをかなえると約束していました。なぜ３つの願いだったのですか。ナチケーターは３日間何も食べず飲まず寝ないでずっとヤマを待っていました。それでヤマは、待たせたその３日間に対して３つの願いをしてくださいと言いました。

２つの願いをかなえましたから、約束していた通りに「３番目の願いを言ってください」と促しています。それが第２０節から始まります。そこから本当のウパニシャッドが始まります。今までずっとイントロダクションみたいでした（笑い）。

皆さんにとって突然に哲学の話から始まりますと話がかたいと感じますね。難しい。興味がなくなります。そこで最初に物語のようにしてやる気を作って、次に本当のウパニシャッドが始まります。それが聖典を作る方のやり方です。

薬は苦いです。いつも苦い。それで砂糖でコーティングしますと、薬を飲むときにあまり抵抗がなくなります。それがシュガーコーティングピル（糖衣錠）。聞いたことがありますか。ピルが薬、シュガーコーティングが糖衣。聖典を作る人もそれと同じやり方です。

最初はいろいろな物語です。ラーマクリシュナの福音の中にも物語がたくさんありますね。物語は印象的で感動的です。イエスもそうです。バイブルの中にも物語がありますね。それからお釈迦様の教えの中にもありませんか。たくさんあります。物語を使うとわかりやすいです。イメージを理解することができます。しかも面白い。

**＜第２０節に入る前に＞**

第２０節に入る前に少し説明しておきます。カタ・ウパニシャッドの話は、ナチケーターのヤッギャーを行うと死ぬ前にとても楽しみ、死んだ後にもっともっと楽しみ（天国の楽しみ）が得られるとありましたね。普通の人間の目的はそこまでですね。

普通の人間は何が欲しいですか。いつも世俗的な楽しみでしょう。普通の人は、肉体的と感覚的な楽しみ、例えば、快楽が欲しいです。そしてときどき心の楽しみも欲しくなりますが、それでほとんど終わりです。知的な楽しみを欲しいと思う人はあまりいません。普通の皆さんはほとんどが肉体的と感覚的な楽しみを欲しがっています。

ですが、もう少し高いレベルの人はもう少し良い種類の楽しみで長く続くものを欲します。その人は天国に行きたい、その考えが出ます。ヤマもナチケーターがその種類の人だと最初考えました。ヤマはナチケーターが最高レベルの天国（サッティア・ロカ）に行く方法を知れば、ナチケーターにはたぶんもう別の願いはないだろうと考えました。

そのように考えましたが３つの願いをかなえると約束しましたから、３番目の願いを尋ねないといけません。そして尋ねました。

ナチケーターは本当は特別な方です。どうして特別な方でしょうか。なぜなら、ナチケーターは２つの楽しみ、すなわち、世俗的な楽しみ（世界の楽しみ）と天国の楽しみで満足していないです。ナチケーターはその種類の方でしたから次の質問が出ました（第２０節）。

ヤマはびっくりしました。なぜなら、ヤマの考えでは２つの願いで十分ですね。普通の人のことを考えればそうではないですか。世界の楽しみと天国の楽しみで十分です。ヤマはそう考えていました。

約束したので尋ねましたが、ナチケーターにさらなる願いはないと考えていました。しかし、ありました。そこからウパニシャッドは始まります。ナチケーターのその質問は何ですか。ウパニシャッドの基礎的な質問は何ですか。それとナチケーターの質問との間にどんな関係がありますか。それは次のクラスのときにお話しします。

以上